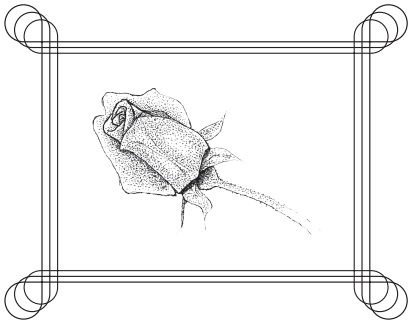
ESSAY

大平学校エッセイ集

ESSAY



目次

夢 2
前兆 4
散歩 6
おぼろ豆腐 8
おでんセンター 9
深まりゆく秋を感じて 11
勇気の根源 13
人生は、川の流れのように 15
自分らしさを求めながら 17
突然の来客 20
思い出し笑い 22
雨のしずく 24
老いる 26
悲しい雪 28
春の訪れ 30
第一三回目の雛祭り 32
人間らしく自分らしく 33
ショッピング 35
私の春色の記憶 37
弟 39
虹 41
バランス 43
父の芹摘み 45
レント 47
お気に入りの傘 49
私の病気 50
花火大会 53
私の憂鬱 55
凍える夏 57
ストレス解消法 59
夏が来れば 61
お祭りのメロディ 64
安楽死を見つめながら 67
家族 69
誕生日の花 71
化粧 73
アニーの消えた空 75
「雨にも負けず」について 77
「誕生日の花」NO.2 79
今を生きる 81
パンプス 84
約束 86
美食の一品 88
雛祭り 91
桜 NO.2 93
顔 95
無題 97
優しさ 101
一期一会 103
宿命 105
あとがき 107

大平幸枝エッセイ集

夢

どうも私は以前よりもまして頭の中が単純になったみたいだ。何故ならその日見たものでちょっとインパクトが強いものがあると必ずと言っていい程その日のうちに夢に出て来るようになったからだ。例えばこの前、獰猛そうなクマがオリに入れられ歯を剥き出しにしていたのを、ＴＶかなんかのニュースで見たら、たちまちクマに追いかけられ必死に逃げ惑う夢を見た。かと思えば、心霊写真が出て来る恐怖の映像をチラッと見たその日には、夢の中でも恐怖の写真が出て来る。ズラッと整列した人間が、私の方を向いてニヤッと笑うのだ。

昔はこんな事はあまりなかった。

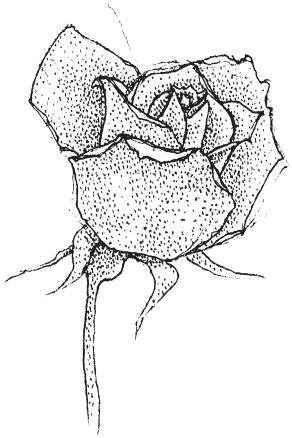
頭がそれだけ単純化した証拠だ。どうも私は大人になればなる程その傾向が強いようだ。普通の人ならば、私ぐらいの歳になれば歳相応の落ち着きを持つのだろうが、悲しいかなその落ち着きを持ち合わせていない。

少しの事で動揺する。これがいけない、どうしたものかと考えて

みるが、一向に埒があかない。

考えても無駄な抵抗の時は、それ以上突き詰めない事にしている。

（二〇〇二年九月）



前兆

思い起こせば私が倒れたのは、ある前兆があった。その頃母は今でも通っているが、スイミングスクールで私には出来ないバタフライなどをしながら、もう六〇だというのに水泳に勤しんでいた。私はと言えば一応エアロビクスなどをしていたが、砂糖抜きのヨーグルト片手に、いそいそとスイミングスクールに出掛けて行く母の姿を横目で見ていた。

そんなある日、母がわたしを誘って来たのだ。私は半ば強引にプールの中に沈められた。昔サーフィンをしていたから水には慣れていたが、単なる泳ぎだけは嫌いだった私には指導員のやる事なす事が面白くなく、その日は惨惨な思いをして家路に着いた。

家に着き一息ついて間もない時だった。私は無性に頭が痛くなり、頭を抱え込むとその場に倒れ込んでしまった。何と言うべきか、頭に酸素が行き渡ってないような、そんな気がして凄く苦しかったのを良く覚えている。今でも言い表すのにとても表現のできない苦しみを味わっている。あれが今から思えば、こうなる一つの前兆だったわけで、脳幹梗塞の前ぶれは確かにあったのだ。今頃、前兆の重大さに気付いてももう遅すぎるのである。

（二〇〇二年一〇月）

散歩

九月も半ばにきたある秋晴れの午後、久しぶりに散歩に行くというので、外に出た。何ヵ月ぶりだろうか、散歩に行くなんて。私の心は大いに弾んだ。外に一歩出ると秋風が私を包んだ。私は初めて体一杯に秋を感じて、一人夢中になってはしゃぎ回りたかった。でも、私の手と足がそれを許さなかった。口を大きく開けてそのきれいな空気を思いきり吸い込むのが、私のできる精一杯のことだった。悔しくて、ただただ無性に悔しくてやり切れなかった。

車椅子は硬いアスファルトの上をガタピシ揺れながら進んでいった。いつものように。風はもはや秋風が吹いていたが、照りつける陽射しにはまだ夏の名残りがあった。私はふと寂しさを感じた。お祭りの名残り、海の賑わいの名残り、雪景色の名残り、こうして考えてみると、名残りというものには、深い味わいがある。私は、今まできらびやかに光っていたことが、だんだん光を失いかけていくさまに心惹かれる。昔の私ならばそうは言わなかっただろう。私のたどってきた長い年月がそう言わせる。

犬がいる所まで行ってみよう、との職員さんの一言で、私たちはその辺りまで進むと足元に小さな花壇があって、そこにも季節はずれの可愛らしいあげは蝶がとまっていた。久々に散歩に出た私を待っていたようで、しみじみと見入ってしまった。

見入っていると、車椅子は動き出して、目に映る景色もどんどん変わっていく。この辺りはほとんど緑一色だが、私にはそれがすごく嬉しかった。いつもチョコンと牛が顔を出している牛舎にも寄ってみたが、あいにく牛も散歩中だったのか、中はガランとしていた。この牛舎も、変わっていく景色も、以前に見たようなのに、今の私には始めて見たような新鮮さを感じた。最近の私ときたら、建物の中のベッドの上でピコピコと打つパソコンとにらめっこだったから、散歩という何気ない行為が、私と自然を結ぶこんなに大切なことだとは気づかなかった。そして改めて自然の有難みを知った一時間だった。

（二〇〇二年一〇月　かわうそ文芸掲載）

おぼろ豆腐

また、弟の夢を見た。最近とり憑かれているように、よく夢を見る。今回はみんなで何故かおぼろ豆腐を食べている。そして、ふと振り返ると腫れぼったい顔をした弟がいる。私に何やらきつい事を言われたらしく、ブーブー言いながらまずそうにおぼろ豆腐を口にほおばっている。

何故にしておぼろ豆腐なのかと考えてみる。豆腐の特集か何かでおぼろ豆腐を見かけて以来、私はとりこになってしまったからである。豆腐をあの様にして食べたいという観念が私の頭の中にはびこって離れなかったらしい。食べ物の夢はよく見るが、こうも喉から手が出る程食べたいと思ったのは初めてだ。

夢って頭の中でどう組み立てられているんだろう。誰もが不思議に感じることを私も一応不思議がってみるが、到底決着がつかない。結局おぼろ豆腐はおぼろ豆腐で良いのだと言う結論に達する。

（二〇〇二年一〇月）

おでんセンター

辻堂の海へ向かいながら続くバス通りは、何度ボードを抱えて自転車で走ったことだろう。もう大昔の話になるが、そんな若者たちが行き交うその道路沿いに、おでんセンターと呼ばれる一角があった、おでんセンターは、隣りどうし競い合うようにひしめき合って並んでいる。同じ並びには、その一角とはどう見てもミスマッチなサーフショップが建ち並んでいた。私は妙にこの場所に惹かれていた。賑やかな中にあって、この素朴で暗く寂れた感じが、いやに私の心を揺さぶった。これが、おでんセンターだけだったとしたら、さして興味が湧かないであろう。異質なサーフショップが一所にまじっているから、私の心に妙に訴える。まるで人間の縮図を見ているようだ。人間には、必ず明と暗が潜んでいる。賑やかさと寂しさは、常に隣り合わせである。私は、いつもそんなことばかりを考えていたわけではないが、その風景を見ると、思わずふとそう感じてしまう自分がいた。

今でもあるだろうか。懐かしさで胸がいっぱいになる。今でも、

私たちの昼間つかれきった体を、夜になると癒してくれているのだろうか。おでんセンターは、私たちの心と体のオアシスであったのだ。そんな素晴らしい場所が、いつまでも存在し続けるように願いつつ、昔を懐かしみ、一人ほくそ笑む私だった。

（二〇〇二年一〇月）

深まりゆく秋を感じて

毎年今頃の季節になると、秋の物憂い静けさを体全体で感じて妙に心細くなる。特に今年は格別だ。倒れて以来の住み慣れた家を離れて、初めての秋という季節。もう秋か、とぽつりと思う。どうあがいてみても季節は待ってはくれない。今までは賑やかで華やかな季節が私を囃したててていたから、あっという間に季節が過ぎて気がついてみたらもう随分と時が流れたみたいだ。

入所する前は、自分の中で入所に対しての凄い葛藤があった。今でも、この先のことが不安になって大きく圧し掛かって来る。その度に、こうして考えてみても何も始まらないと思い諦める。そのくり返しで一日が終わってしまう。多分ここに居る皆も同じような悩みを抱えて日々一生懸命過ごしているんだろうなと思ったら、さほど生きて行くのが怖くなくなる。こう思えることが今の私の一番の支えになっている。一人家で孤独に耐えていた時とは訳が違うが、それでもここに居ると少しでも癒されるのが救いである。

今頃の時期だったろうか、ヘルメットを抱えて左手の教習所の教

科書に目を落としながら電車に揺られていたのは。あの頃は意気揚揚としていて実に良い頃だったなと、ふり返ってみる。私を取り巻く環境も変わったものだと思う。血気盛んなあの頃でも、小さいながら何かに対する不安は常にあった。同じ季節の中で、比重はかなり違うにしても、生きていく上での不安にうろたえ悩んでいる私がいる。秋という季節はそういう季節だ。いつの時代であっても人々を切なくする深まりゆく季節の中で、私はこうして一人物思いにふけるのである。

（二〇〇二年一〇月）

勇気の根源

三崎口からの帰り道だった。その日はやけに横風が強かったが、中型バイクに乗り初めてまだ間もない私は、ただ風を切って海岸線を走ることだけに夢中だったので、風の吹く強さや方向などには、まったくと言って良いほど関心が無かった訳で、帰る頃には相当吹き荒れ出した海からの横風に大いに慌てふためくはめになった。

気が付くと、私は江ノ島にほど近い所を走っていた。この辺はバス通りになっていて、大型バスが我が物顔で中央車線ギリギリの場所を飛ばして行く。私のバイクももの凄く強い横風に押し流されてセンターラインスレスレの所にいた。私は右足で必死にバランスをとっていた。右足をバイクの脇に出して走っていたのだ。道が空いていてガラガラだったのが幸いしたのだろう。暫くそうして走っていると本人が必死なのを知ってか知らずか、正面から平然と大きなバスが姿を現したのである。

その時の私にはそのバスが挑戦的にさえ思えた。バスはどんどん迫って来る。わずかちょっとでもバランスを崩したら正面衝突は避

けられない。スピードは落としていたもののバスとでは到底太刀打ちが出来ない。私は大いに慌てたが、今更慌ててもうどうしようもなかった。バスとバイクとの距離は三〇センチ足らずだったと思う。私は冷や汗をかきながら、緊張で右足が硬直するのを体で感じ、やっとの思いでそのバスをやり過ごしたことを、今でも時々思い出しては懐かしむのである。

もう今となっては懐かしい対象のひとつになってしまったが、あの時の自分としてはそれなりに必死だったのが何だか愛おしい。私にもあのような頃があって、今があるのだなぁと改めて思う。周りの皆にはちっぽけな経験にみえても、その時の私にとっては何よりも替え難い経験だったのである。今こうしてパソコンを打ちながら当時を振り返って、こんな私でもバイクなんかに乗れていた頃があったと思うと、自然と勇気が湧くのである。このような出来事が、私の心の中に少しだけ潜んでいる、勇気の根源なのである。

（二〇〇二年一一月）

人生は、川の流れのように

遠くで鳥が鳴いている。ひたすら空虚な時間だけが流れる。これでいいのかと自問自答してみるが、いつもその繰り返しで日々が過ぎて行く。人は模索しながら成長していく。模索しなくなった人間は人の抜け殻と化す。

私はこれまで度々流れに逆らって、うろたえ苦しみながら歩いて来た。私はあまのじゃくだから、何故か大きな流れが押し寄せて来ると反対方向を向きたくなる。有名な詩の題名にもある「川の流れのように」と思いつつも逆を向いてしまうのは何故だろうか。詩のように流れに沿って生きることは、容易いようで容易いことではない。今実感してそう思うのである。けれど、あの詩は実に深みがあって人々に感銘を与える作品だなと常々思って来た。私はまだまだ人生について悟りを開く歳には達してないが、この詩はわかるような気がしてならない。

若い頃私が壁に突き当たった時など、一人の友人から決まって聞いた言葉が「なるようになる」。私はいつも身勝手な言葉だなと感

じていたが、今になってその言葉を切実に受け止められる。その当時は必死にもがいて自分を見失っていたのである。友人の言葉に深く耳を傾ける余裕など持ち合わせていなかった。これも若気の至りとでも言うのであろうか。やっと今となっては、いろんなことを模索しながらもこの言葉に大きく同調することが出来るようになった。私が人生を口にするのもまだおこがましいが、人生はまさに〝川の流れのように〟である。

（二〇〇二年一一月）

自分らしさを求めながら

月並みだが月日が経つのは本当に早いものだと感じる。私がこの部屋に移り住んで来たのが今年の六月で、もう年末を迎えるのである。ついこの間まで真夏の喧騒に浸っていた自分が嘘のようにゆらゆらと揺れながら遠くの方で蜃気楼のように見える。あの暑かった夏さえも今となっては愛しい。悲しいかな、人間は新しい出来事が積み重なっていく度に古い記憶は薄れていくという具合になっているものである。そういう仕組みになっているのだから仕方ない。私がどうあがこうと、遠くの方で蜃気楼は揺れているのである。

私は結局の所、家を離れて良かったと思う。家では経験のしないことを沢山し、多くの人達と接し一期一会の尊さを学んだような気がするからである。自宅で一人ふさぎ込んでいた頃がまるで遠い昔のことのように思われる。

長い間自宅に引き込んでいたので、一歩外に踏み出すのが恐かったのだ。ほんの少しの勇気で色々な発想が涌き出て来ることに気付いた今、心が和んでいる事実にも気付く。初めて過ごすこの部屋で

の年末、師走だというのにゆったりと時が流れる。自宅では味わえない感覚である。

ふと、これでいいのかと思ったりもする。年末は忙しいものといった固定観念が私を突き揺るがすのである。この半年を振り返って考えてみる。まず、生活のリズムも一定化して来たようだし、気持ちも安定している。時折、こんな平穏な生活が続くと恐ろしいような不安感に苛まれるが。私はこの部屋に来て多くの事を考え悩み、そして学んだ。ここではより自分らしく生きられるような気がする。では私らしくする為にはどうあるべきかと考える。ここに来て初めて「言論の自由」の楽しさ、厳しさを知ったと言えよう。家ではそれなりに束縛があったと思う。それは私だけが感じ得ていたことに過ぎないかも知れないが。私は自由に喋ることは無論、何も一人では出来ない。だから私なりの精一杯の表現を駆使してこの紙に書き連ねていく。最も私らしく表現出来る場所である。

私らしいと言うのは自分を多かれ少なかれ束縛していた呪縛から解き放たれた時に発揮するのである。私の場合は。今考えを振り絞っている自分は、客観的に見れば凄く孤独な作業だ。私は孤独イコー

ル淋しいと決定づけていた。こんな遣り甲斐のある孤独というものもあるのも知らずに。私は家を離れてみてもう一つの孤独の意味を知ることになる。

人は皆孤独である。老いて行く両親が一番実感していることだろう。それを思うと心の底から熱い思いがこみ上げて来る。

今改めて思うのである。それはきっと、いい距離を保っている為と、私が心に余裕が出来たから真からそう思えるのだろう。私は三一日に帰ることになっている。久々に懐かしい空気が私を包むだろう。こうして一年が終わる筈だ。私はいつまでも自分らしさを求めながら。

（二〇〇二年一一月　文芸ふじさわ三七掲載）

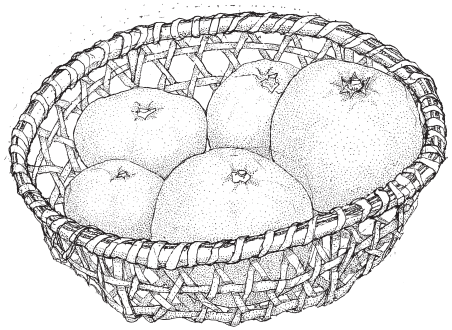
突然の来客

この間祭日の土曜日、弟夫婦が子供を引き連れて私のこの部屋にやって来た。弟は椅子にドカッと座りぎこちなく周りを見渡しながら「ふぅん、こーゆー部屋か。」と半ば安心する様につぶやいた。弟が訪ねて来るのは初めての事であった。私はこの突然の来客に自分の弟ながら、すこし頬を紅潮させてつぶやいた。「ちょっとおじさんになったねぇ」昔から私達姉弟の間では多くの語り合いはない。その代わり二人だけにわかるユーモアがあった。それが今でも健在であった事が妙に嬉しかった。

私が病気で倒れた時弟に何度も両親の事を頼むと言った自分が記憶の中に焼き付いている。私がこうなった以上弟だけは幸せな結婚をして可愛い孫を、と思ってた私の願いが叶った事がこの上なく嬉しくてたまらなかった。三人がとても幸せそうに見えた。私が元気だったらもう今頃には何人の孫を両親に見せてた事だろうとも考えた。私が元気だったら・・・もう何一〇〇回いや何一〇〇〇回思った事だろう。三人を見送った後そんな余韻に包まれていた。とても私

にとって意義のある時間だった。

（二〇〇二年一二月）



思い出し笑い

私は思い出し笑いをよくする。世間一般では、思い出し笑いを得意とする人はエッチだと言うことになっているが、ご多分に漏れず私もその中の一人である。

私は自分の周りで話をしている多数の人達の話には耳があまり聞こえないせいもあるが、熱心に耳を傾けようとはしない。一対一で自分に話をされているときは体中が熱くなる程夢中になって聞くが、それ以外はあまり興味を示さないのである。どうも自分の殻に閉じこもり易いようだ。

その日一日の中で、人間が自然体の中からかもし出す、私にとっての最高におもしろい出来事があれば、夜寝るまでそのことが頭から離れない。自分がぞっこん惚れこんだ楽しさには、どうもめっぽう執着してしまうらしい。

大昔にこんな出来事があった。私はいつものごとく、いい調子でお風呂に浸かっていた。その時だった。背後で何やらズシーンズシーンと鳴り響く物凄い音。私は必死に助けを呼ぼうとしたが、こんな

格好ではと思い留まり、あれやこれやと思案中だったその時、物凄い音の正体がわかったのである。何と父親が酔っ払って車ごと我が家に突撃していたのだ。勿論母親は慌てふためいていたが、私はおかしくて、呆気にとられながらも、ひたすら笑いつづけた思い出がある。

その想い出を度々思い出しては、一人思い出し笑いをするのである。

（二〇〇三年一月）

雨のしずく

こんな静けさの中に居ると、つい時を忘れてしまう。自分が何故こうして寝ているのかさえも。あの頃に戻りたいと、皆がそう感じることを私も改めて思う。私のあの頃とは言うまでもなく、立って元気に歩いていた頃。

断片的にだが、倒れた瞬間が蘇る。ただ事ではないと思ったが、まさかこんなことになるとは。倒れた直後の雨のしずくを、何故か未だに覚えている。それはそれは、悲しい雨のしずくだった。私はその雨のしずくを、自分をこのまま連れ去ってくれる何かの合図だと思ったんだ。本気で思ってた。それほど私の頭は混乱し、その場から逃げ出したい状況だった。雨のしずくにまで助けを求めたかった私の気持ち、お察し頂けるだろうか。

闇に包まれて一滴一滴窓に打ちつけられていく雨のしずくを、あんなに呆然と眺めていたことはない。あの時もこんな風に静かだったなと振り返る。又、身体をベッドに横たえながら感じ取った孤独な音色は、風が通り過ぎる音。ヒューヒューと吹きすさぶあの音は、

何とも物悲しげでやり切れなさを覚えたものだ。私はこれまで、風の音をこんなに身近に感じたことはなかったと思う。

こんな静けさの中に居ると忘れられない光景が蘇る。

（二〇〇三年二月）

老いる

私は時折激しい恐怖心に苛まれる。このような毎日を繰り返しながら私は老いていく。人間にとって、いやこの地上において生きるすべての生物にとって、老いとは必然的なことではあるが、受け入れ難いことでもある。私は決して、自分自身が死ぬのを恐れているのではない。どこかの国の部族で、生きている事は死ぬ為の準備期間である、という考え方で毎日を生活して、あくまでも生より死を基準とする人たちがいた。が、私はそれを聞いていて頷けるものがあると思った。考えてみると、それはもの凄く悲しい日々に思いがちだが、人間の摂理に叶った行為と思うのである。

生物は何故老いるのだろう。私はこれ以上自分の親に老いて欲しくない。誰もが思っていることを真剣に思ってみる。クローン人間とやらが叫ばれている昨今、永遠の命も開発しないのだろうか。

私の激しい恐怖感というものは、言葉では表しづらい。私がこのような毎日を送っていっていいものなのだろうか、と言う一種の焦りから来るものもある。こんな私でも何か伝え残せるものはないか、

出来ないものかと言う自分に対する脅迫観念が働くことと、今の生活が少しずつ形を変えていくだろうと言う空虚さ、が自分の中で複雑に絡み合って、私を追い立てるのである。

老いは必ず巡って来ることなのに、必死に否定したい自分がいる。自然に老いるまま、赴くままに歳を重ねていければ、それが一番美しいのに。

私は思う。老いとは誰でも避けられない現実であり、それまで自分が成し遂げてきたことが心に深く刻まれることだろうか。そうした一抹の寂しさを乗り越えて、皆少しずつ前へと進んでいく。まだ私にはそれぐらいのことしか言えないが、時には立ち止まって悩んでみる余裕も人生において必要だと思うのである。

（二〇〇三年二月）

悲しい雪

倒れて以来初めて私の目に映った雪は、それまでに見たことのない、嗚咽を伴うほどの、それはそれは悲しい雪だった。

私は、七里ガ浜の海岸線のほど近くに建てられた古びた病院の、渡り廊下のストレッチャーの上にいた。空はどんよりしていた。ひらひらと、幾重にも地上へ舞い落ちる雪は、その頃の私の目には、紙くずのようにしか映らなかった。無感動になっていた私は、雪のことなどどうでもよかったのである。看護婦さんが優しく、降りだしたことを私に告げても、私の心は氷のように冷たかった。

皮肉なもので、今となっては一番記憶に残っている雪だ。今でも、窓越しに降り積もる雪を眺めるたびに、あの時の雪を思い出す。暗く沈んだ空は、くっきりと目に焼きついている。雪ほど見る側の角度によって形を変えてしまう自然は、いくら捜しても見つからないと思う。私は、その自然の中で、雪と一緒に溶けて無くなってしまいたいと思っていた。いつも思うが、そのときのストレッチャーは格別ひんやりと硬く、人とはそぐわなかった。ストレッチャーには

独特の冷たさがある。

ここは七里ガ浜、昔よく遊んだ場所である。私をこれほどまで無感動にさせたのは、この土地柄に多分に影響されていると思われる。以前は友達と戯れ親しんだ同じ場所で、今私はいったい何をしているのだろうと思った瞬間、涙が溢れ出てきて止まらなかった。私は声にならない声を上げて泣いていた。寒い病院の渡り廊下の途中で、吹きすさぶ悲しい雪を見つめていると、そのときの自分の状況が把握できずに、次から次へと想い出が浮かんでは消えていく。こんな状況下にもかかわらず、羽が生えて飛んでいく気すらしてくる。だが、現実に目をやると、何処も動いてはくれない体が横たわっているだけ。私は、この恐ろしくも激しいｇａｐにただ泣き尽くすことしかできなかった。

看護婦さんには、私があの時こんな思いで、空から降り続ける雪を見つめていたことが分かったでしょうか。

（二〇〇三年二月）

春の訪れ

静かである。物を書くにはうってつけの日和である。私は必死に題材を頭の中で思い巡らすが、良い発想が浮かばないのである。こういう時は旅に出掛けるのがいいと思うが、そういう訳にもいかない。季節は冬から春に移り変わろうとしている。おそらく人々の大半が春を待ち侘びていたことだろう。ちょっと時期は早いが、家にいた頃、母がよく蓬を摘んできて、ペッタンペッタンと蓬団子を作っていたのを思い出す。あの力強い音ももう聞くことも無いと思うと、私の胸の中は寂しさで一杯になった。

暦が新しくなった。部屋が心なしか明るく見える。どれもこれもに新しい命が吹き込まれたような新鮮さを覚える。みんな作り物なのに動き出す気さえする。春はこんなにも私達の心を躍らす。こんな日は、ふと風にまかせて一人旅が出来たらいいな、という思いを胸一杯に膨らませてみる。私の場合、想像の域を出ないが、多分手に余るような色々な発見をするはずだ。気分の赴くままに足を運ぶことが許されたならどんなに自由を感じるだろうか。

私は昔、季節は違うがぶらりと京都へ一人旅に出掛けたことがある。今とは視点が大きく異なるが、それなりに収穫があったと思う。大勢で旅するのも、それはそれで楽しいが、一人旅は征服欲というか、達成感というか、人とのふれあいを通じて培ったものや発見などで、人間が一回りも、二回りも成長する気がする。

昨日散歩に出掛けた。私にとっては唯一季節を味わうことの出来る小旅行だ。梅が鮮やかに咲いていたのは印象的だったが、帰りの真っ向から吹き荒れる風には大いに泣かされた。それでも、この小旅行へ連れて行ってくれた職員さんに心の中で感謝した。私はGOOD TIMINGで春の訪れを知ることが出来たのを感謝して止まない。

（二〇〇三年三月）

第一三回目の雛祭り

希望の郷の雛祭り会は三月五日に開催された。艶やかに着物を身に纏った女性達が、ほんの少しだけ化粧を施して貰い最前列に腰掛けている。

この催しを優雅な音色で盛り立てて下さったのは、ハーモニカによる演奏だった。ハーモニカの音色は私たちの郷愁を呼び覚ます。懐かしい響きが会場いっぱいに広がっていた。

選曲のバランスも非常に良かったと思う。私たちの心に訴えるものがあった。ハーモニカの持つ素朴な味わいが、暖かいハーモニーになって私達の心に溶け込んで行くのが解かる。幼い頃誰にでも手にした事のあるハーモニカには、親近感を覚えずにはいられなかった。

本当にPureで素晴らしい演奏だったと思う。機会があったら又ぜひ聴きたいと願って止まない。

（二〇〇三年三月　希望通信へ）

人間らしく自分らしく

私は以前に「人間らしく自分らしく」という一冊の本を書き上げた。あれから早何年経つことだろう。私の若かりし日の記憶の一ページである。

思い返してみると、この一冊は、このままじゃいけない、私には残された機能がまだあるじゃないか、と打ちひしがれている自分を奮い立たせ、半ば差し迫った状態の中から生み出されたものなのである。写真も嫌いになった。鏡も見ない。時々床屋さんで見せてくれる鏡は笑ってごまかした。私にとっては耐え難い屈辱だった。今でも、女性の端くれとしてこの悲しみは拭い去ることができずにいる。

タイトルとなった「人間らしく」は、外見は障害者でも心までは障害に負けてはならない、いつでもどんな時も人間が持っている温かく素晴らしい気持ちを持ち続けていたい、と言う意味である。自分らしく」は、立派な人間になろうとは思わない、私はどんな小さいことに対しても愛のある精神で生涯を貫き通したい、というと

ころから来ている願望の言葉なのである。私は味な人間になりたいと常々思っている。私が頭の中で思い描いている粋な人間になるには、幅広い知識と豊かな経験と、その人なりのパーソナリティが必要不可欠である。それに加えて「能ある鷹は爪を隠す」が良いと思う。理想は理想として、心得ておくことにしよう。

一冊目を書き終えたら、二冊目もどうかと皆に言われた。終わり方が、続きを匂わせているというのだ。私としては余韻を残したい狙いがあったのに、それが読み手側にほとんど伝わらなかったのが悲しい。いずれにせよ、私が障害者として生きていく上で、この「人間らしく自分らしく」は重要な基盤を担っているのは確かである。

（二〇〇三年三月）

ショッピング

三月一九日の水曜日に、Vinawalkに行ってきた。いつもと大いに違う場所での食事は緊張を伴ったが、すべてに新鮮だった。

職員さんに、注文したスパゲティを口まで運んでもらいながら、窓から眺める真っ青な空に流れいく雲。何度も見た景色なのに、微妙に今日は澄みきっているように見えた。そんな景色と一緒に堪能した味が素晴らしかったことは言うまでもなかった。私は、希望の郷の造りを考えてみた。向き合うのもいいが、主観を入れれば、空を眺めながら味わう方がもっといい。孤独に慣れてしまったせいだろうか？

今回のメインは食事会だったが、少々時間が余ったので、買物timeになった。私の目指すは、チョコレート売り場と石鹸売り場。両方ともプレゼントだった。

私は思った。私のようなお客が売り場に来た場合の接客態度というのは、さぞ気を使うのだろうなって。希望の郷という団体を抜けたら、一障害者にすぎなく見られているということを、健常者の中

にいると痛感せざるをえない。あー、私はあーゆー事もこーゆー事もできないんだなあと、改めて思い知った。一ヵ月に一度でも、こうした行事を作って俗世間に触れさせてくれることは、良しにつけ、悪しきにつけ、私にとっては刺激になっている。

職員さんの助けをかりて無事プレゼントを買うことはできたが、帰りの車の中では、一言もしゃべれないほどの状態だった。平日の午前中でお店は比較的空いていたにもかかわらず、私は久しぶりに見る、私を知らない健常者たちと接して疲労困憊だった。もちろん体も、これ以上は、というほど疲れていたが。

私は一人、部屋に帰って考えた。いつでも自分らしくありたいと。

（二〇〇三年三月）

私の春色の記憶

私はまばゆい光の中に溶け込んでいった。太陽との交わりは私の眠っていた心を呼び覚ます。

桜の木々の間から注ぎ込まれる光のシャワーが眩しくて、思わず目を閉じた。私は心地よく太陽の陽を浴びながら昔のことを回想していた。桜を舞台に目を閉じると浮かんでくる、嬉しそうにはしゃぎながら走りまくっている愛犬ムクのお尻。そこは七沢病院。私達親子は今までお花見らしいお花見はした思い出がなく、その時が初めてだったのですごく印象深く私の心に焼き付いている。ムクとは、私が倒れて以来一緒に暮らしているシーズーのメスである。だから私にとってはことの他思い入れがある。そのムクとお花見が出来たのだから、私も嬉しくて駈けずり回りたいほどだった。桜は毎年咲き続ける。それぞれの思いを秘めながら。

この季節になると辺り一面春色の空気に染まる。一歩外に踏み出れば春色の風が私を優しく包む。妖精でもいるような不思議な世界

に迷い込んでいる錯覚に陥ってしまう。特に朝の明るい太陽の陽射しを浴びていると、忘れもしない私の大切な記憶が蘇る。どこまでも続く砂浜、無造作に置かれたテトラポット、キラキラ光る海。あの頃は全部自分の手の中にあると思っていた。毎年春色の空気が流れはじめる頃思い出してしまう。春色の風に舞う波もまた、美しく華やかに光って映っていた。

この春色の想い出が、いつまでも褪せることなく輝き続けて欲しいと願って止まない私がいた。

（二〇〇三年四月　かわうそ文芸掲載）

弟

唐突だが、私の弟は幼い頃カメが大好きだった。それも生きているカメじゃなく、よくお風呂に浮かべて遊ぶ10㎝ぐらいの玩具の青いカメ。いつも肌身離さず持っていて、私がいたずらをして押入れに隠しても、どう探し当てたのか翌日にはしっかり枕もとの横にある。

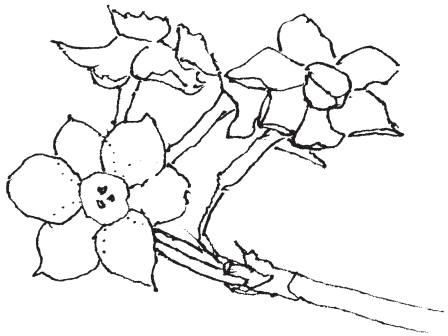
また、百科事典を広げては、逆さまになって足と足の間から覗き込んで見ていたのを覚えている。本を見るのに何であんな不思議な格好をするのかと、私は私なりに悩んでもみたが、結局、彼があれでベストな体勢ならいいんじゃないか、という結論に達した。

私と弟は六歳離れているが、それでいて良い姉弟だと思う。弟はよくパシリに使われた。6歳も年の差があると、幼い頃は比較的従順だった。私は弟を良き子分のようにして扱い、姉貴風を吹かせていた。弟にとってはそんな私がどんな風に映っていたんだろう。きっと憧れの存在だったに違いない、と思いたい私であった。

その弟にも、三年前やっと新しい家族ができ、すぐに甥っ子も誕

生した。可愛いを通り越して、私にとっては摩訶不思議な存在なのである。

（二〇〇三年四月）



虹

夕飯を食べようと、いつもの席に着いている時だった。「大平さん、珍しいものが出ているから見せてあげる！」と言うやいなや、職員さんが私が乗っている車椅子をくるっと清水さんの部屋の方向に向きを変えて押し出し、「ちょっと失礼」と言いながら、主がいない部屋にちゃっかり入ってしまった。私は「いったい何を見せてくれるのだろう」と内心ワクワクした期待に胸をふくらませていると、突然、職員さんは窓を開け放ちベランダに降りて、楽しそうに弾んだ声をかけた。「ほら、そこから見える？」 最初はどこを見ていいかわからず、「見えない」と言うと、職員さんは口惜しそうにすごく残念がって「大平さん、遠くは見えないんだっけ？」と聞いてきた。私はそういう職員さんの表情を伺い見ていて、「こりゃあ、どうしたって見ておかなくちゃ」という思いがした。

私はジーっと目を凝らし遠くを見つめた。すると、そんなに目を凝らさなくても、目の前で見事に輝く虹にやっと気づいた。私がはしゃぎながら「見えた！見えた！」と言うと職員さんは嬉しそう

に、はたまた満足げに「久し振りだな、虹なんて見たの。」と呟いた。虹を見ていたのはほんの数秒だったが、今でも目に焼きついている。自然の神秘さをまざまざと見せつけられた。夕暮れ時の、微妙にオレンジ色が混じる空には、色鮮やかな虹がオーラを放っていた。

すぐに自分の席に戻った私は、しばらくボーっと余韻に浸っていた。ここの窓からは虹は見えなかった。ただ桜の葉がサワサワ揺れているだけだった。空を見上げると、雲の切れ間からオレンジ色の光がそそいでいる。どんよりした空だったから、そのきれいなオレンジ色はなんだかおよそ似つかわしくなく、不気味にさえ感じた。虹が出るときの空の表情って、こんなだったっけと一人思った。

さっき見た虹は、私の行く末を暗示しているかのようだった。

（二〇〇三年五月）

バランス

お散歩日和のある日の午後、職員さんを含む私たち三人は、いつものコースを晩春のぬくもりを感じながらゆっくりと歩き出した。私は陽射しが眩しくて目を閉じたままだった。気がつくと男の子たちがキャッチボールをしている野球場を眺めていた。三人で何分間ボールを追いかけていたことだろう。私の目には、そのボールが、介護する側と介護される側との重要な柱に見えてきた。両方のほどよい力加減でキャッチボールは繰り返されている。一方のバランスがちょっとでも崩れると、ボールはグラブに収まらない。介護者が上手にバランスをとって、介護される人の気持ちを深い意味でよく理解することこそが私の理想だ。かといって介護される方も、それに充分応えなければならない義務があるが。介護の問題に触れると、何て根が深いのだろうと思う。

私はここ希望の郷に入居して、もうすぐ一年になろうとしているが、心のキャッチボールは良くできていると自分でも感心する。これも偏に、日々努力を重ねている職員さん方のバランス感覚と、素

晴らしい理解力のお蔭だと思っている。
このキャッチボールは永遠に続くだろう。

（二〇〇三年五月）

父の芹摘み

月に何回か、母が父を従えてこの部屋にやってくる。特別二人の仲がいいとかじゃ全然なく、単に母がペーパードライバーで、往復の運転を父に任せているだけのことだ。

母は、私にあーでもないこーでもないと喋りまくっていくが、父は私が書いた文章に目を通すだけで、何か一言言って部屋を出て行く。男らしいといえるが、外でもくもくと芹摘みに励んでいる姿が、散歩に出かける職員さんに目撃された。いつもこのように口数の少ない父だが、母とは違う温かみを残していく。

あれは私が一九歳の春の頃だった。成人式の着物の替りにと、私がリクエストして父に買ってもらった新品の自動車に、やっとのこと仮免が交付され、初めてのドライブに父を選んだのが間違いだった。仮免を貰ったばかりの私の運転は、父にとって恐怖以外の何物でもなかった。私が車にエンジンを入れた時から顔面蒼白で、サイドブレーキを握りしめている。私が急に右折でもしようものなら、文句タラタラで顔は鬼と化している。私は運転しながらも涙をこら

えつつ「失敗だったなあ」と一人呟いていた。
そんなこともあったなあ、と昔を振り返った。父は元来男っぽい女性が好みだったらしく、私がバイクに乗りだしたときも、波乗りを始めたときも、目を細めてたっけ。父が真剣なあまり鬼のような表情になることはあっても、怒られた記憶がない。見ていて飽きない父だ。威厳とかをあまり感じさせず、子どもと一体で自然にいられる人だと思う。
背中を丸めて芹摘みに励みながら、父は一体何を考えていたんだろう。淋しげである。そう思うとつらいものが押し寄せてくる。離れて生活しているせいか、ちょっとのことでも感傷的になる私であった。

（二〇〇三年六月）

レント

最近の私の頭の中は、暇さえあれば次に書く文章のイメージを考えているが、今回はなかなかいい発想が湧き出てくれず、四苦八苦していた。そんなある日の日曜の午後、私はハタと気分転換を思いつき、職員さんに無理を言い、暑い最中散歩に出かけた。
梅雨が到来する直前の陽射しは、肌を突き刺した。ピリッと痛かったけれど、何十年ぶりの痛みは、私に心地よい懐かしさをくれた。今の私の肌の色ときたら真っ白くて、およそお日様とは似つかわしくなかった。
職員さんが、大きな家の建築場所まで車椅子を押してくれた。私たちは、どんな人が住むのやら近くにはスーパーもないのに、などいらぬ心配で花を咲かせた。果たして、この思いつきのお散歩は、私にとって気分を一新するいいきっかけとなったが、帰るなり暑さと疲れで冷たいコーヒーを飲み干し、これほど太陽と仲良くない自分を嘆いても見た。
私は、夜フラフラと友達と二人で、赤ちょうちん目指しながら飲

み歩くのが好きだった。それほど強くはなかったが、いわゆる雰囲気を味わえればよかった。一度、中華街の裏通りにあった、鄙びた居酒屋に入ったことがあるが、足を踏み入れた途端、背筋がゾーッ！

無言のままその場で回れ右をして、そそくさと立ち去った思い出がある。いくら雰囲気が好きだからといっても、限度もんだなあとその時思った。

しばしパソコンとにらめっこしながらそんなことが頭を過ぎった。何故かというと、最近知人から貰った「レント」という美しい焼酎が目に入ったためだった。「レント」の瓶は、そこはかとない美しいブルーをして、それに曇りガラスで霞がかかったような、何ともロマンチックな色をしている。一見すると、ブルーのカクテルが入っているように見える。そして「レント」とは、音楽用語のアンダンテよりゆっくりに、と言う意味らしい。この色彩と見事に融合している。私はこの知人に感謝する。私の大切な記憶とともに。

（二〇〇三年六月）

お気に入りの傘

季節は、みなが嫌がる梅雨のまっただ中である。こんな日は、気分転換に外へ出る訳にもいかず、部屋でどっぷりとうっとうしさと戦っている。

かつては、私にも非常にお気に入りの傘があった。それは、真っ黒でただ一つ「エル」という、ローマ字で白く書かれたワンポイントが付いていたっけ。大きなスポーツバックとお揃いだったのが、私を惹きつけた。私は、雨の日でも心弾ませていた。その傘をさせると思うと、まるで少女が初めて傘を開くようにドキドキした。私の、ささやかな楽しみの一つであった。

こうして、傘の花が満開になる頃になると、まだ咲いてもいない黒い私の傘を探すが、いくら探してみても、お気に入りだった傘は見当たらない。いつしか、何処かへ姿を消したのだ。

たった何年かだったけれど、私の憂鬱と付き合ってくれた時間が、愛しい。もう永遠に咲くことのない、私のお気に入りだった黒い傘。いつまでも、私の心の奥で咲き続けますように。（二〇〇三年六月）

私の病気

私が脳梗塞で倒れたのは、二九歳も残りわずかな時でした。その頃の私は一人暮らしをしていたので、発見が大幅に遅れ、このような状態になってしまったことを今更ながら、悔やんでも悔やみきれない気持ちでいる。あの一瞬から、私の人生は動から静へ変わったのだと言える。

七沢リハビリセンターの先生が、私の頭のレントゲンを見せて説明してくれたことがあった。私の脳梗塞は、生命を維持していく上で一番大切な血管が詰まる、脳幹部梗塞だとのことだった。私は半泣きだった。自分の身に降りかかった恐ろしい事実を目の前に突きつけられて、為す術がなかった。もう二度と、海に入ることはおろか、歩くことすらできないのだ。

私は、倒れる前、二五歳くらいまで波乗りをやっていた。もうあの感覚を味わえることも無く、キラキラ光る砂浜を自分の足で踏みしめることもできない、と思ったら、サラサラと涙が頬を伝わった。とにかく、何もかもが衝撃的だった。大好きだった歌も歌えない。

食事も一人では摂ることができない。以前の私と一八〇度変わってしまった私がいる。当初私は、自分の存在価値を否定し続けていた。できないづくしの自分が、周りのお荷物になってしまっているのではないかと。

ワープロとの出会いは、そんな私に、一筋の光を与えてくれた。自叙伝を書きたい、という一途な思いから、まる一日をワープロに時間を費やすという日々を送るようになった。私は何かに取りつかれたように、自叙伝の制作に力をそそいだ。あんまり夢中になったせいか、それからほどなくしてワープロは壊れてしまい、私の病気は精神的な病を併発し、どん底のうつ状態になり、母に「お願いだから、首を絞めてほしい。」とせがんだこともあった。

現在は、去年購入したパソコンを操り、実家からも離れ、一人この文章を認めている。今まで辛かった日々が私の身となり、流したたくさんの涙は、人への思いやりにつながればと思っている。人間は、自分の存在価値を必死に見つけ出そうとしている。見出せないと、生きている資格さえないと思ってしまう。何の理由もなく自殺していく若者たち、自分の居場所がわからなくなってしまったのだ

ろう。
私は、この病気を通じて、広い視野で物事を感じるようになった。今になってそう思う。私にとっては、口では表せないほどの大変貴重な体験をしたと自負している。

（二〇〇三年七月）

花火大会

七月一九日の土曜、希望の郷恒例の花火大会が開催された。七月の半ばほどの、夕闇迫った七時の空はまだ明るく、期待で膨らんだ私たちの頬を照らしていた。花火は、私たちがまあるく囲んだ中央で点火された。火薬の匂いが、辺り一面立ち込めて、花火を実感する楽しさを盛り上げた。いつも思うのだが、この火薬の匂いっていいものだなぁ、と思う。

夏になると田舎の広い庭を思い出すのは、私だけだろうか。子どもの頃、金色の土の上で、花火と戯れた自分を重ね合わせる。花火を売っている田舎の雑貨店は、坂道を下り、左側が切り崩した大きな山、右側が一面の田んぼ、家から一五〇mほどのところにあった。次から次へと浮かんでくる、幼き日の思い出。

希望の郷の花火大会は、アットホームのなかで進んでいった。なかでも、私の心をときめかせたのは、地面から噴水のように、キラキラと火の粉が舞い上がり、朽ちていく景色だ。見つめていたら、矢沢永吉の「時間よ止まれ」が、ふと頭に浮かんだ。このまま時

間が止まって、あの綺麗に舞い上がる火の粉を、見続けることが出来たら、今の私にとって、どんなに救いであったかしれない。煙が、花火に見惚れていた私を追いかけてきて、二度も場所を、職員さんに変えてもらった。

遠い昔、茅ヶ崎の海の防波堤で花火を見た。あの頃は、今のこのときを知る由もなく、ただ大口開けて空を見上げながら感動していた。あのときに比べると、はるかにしょぼいものだったが、みんなの熱い思いで作られた、心と心のふれあいの花火大会だった。

（二〇〇三年七月）

私の憂鬱

私には、誰にも言えない悩みが二つある。それを考えると、何ともやり切れない、憂鬱な気分に襲われる。どんなに私らしくしていても、ごく一部の人には受け入れられていないような気がするのだ。悲しいことである。この陽気と裏腹に、一層私の憂鬱はふつふつと湧き上がる。

私は昔から聞き役だった。良くいえば相談役、悪くいえばボキャブラリーに乏しいからそうなったともいえる。私は、長い間聞き役だったせいか、自分のことを話すのが妙に照れくさくて、上手に表現することが不得意だった。こと恋愛に関しては、すごく仲が良くなければ明かすことができなかったので、よく水臭いと言われた。私としては、言わなかったのではなく、言えなかったのである。病気で倒れて初めて、このような形で自分の気持ちや感想などを発表しながら、幾分まごついているのは確かなのだ。

私のこの病気は、後遺症がひどい。いわゆる脳梗塞の中でも、一番やっかいな後遺症を引き起こす。私がよく訴える顔面の硬直は、

それに寄るものだ。周りで見ているよりも、本人はずっと辛い。この看護婦さんも、把握していないとなると、私の憂鬱に一段と拍車がかかる。私が障害者であるがゆえだからであろうか。そこには、絡まってしまって、ほぐれない糸が見え隠れしている。その絡み合った糸を、綺麗な一本の糸にしたい、と願ってやまないが、立場上不可能なことだろう。

人間死ぬまで、憂鬱やストレスと戦っていかなければならないが、憂鬱があるからこそ人は思慮深くなる、と私は思う。たかが私の憂鬱、されど私の憂鬱なのである。

（二〇〇三年七月）

凍える夏

なんとしようか、この陽気。チューブの歌も、サザンの歌も、やたら悲しく聞こえてくるだけ。いくら暑かった夏でも、過ぎ去っていく夏は愛しいものだ。それだというのに、今年の夏はそんな気持ちを尻目に見て、早くも秋の訪れを私たちに感じさせる。夏暑いからこそ、秋が引き立つ。冬寒いからこそ、春が引き立つのだ。こうして季節は巡ってやってくるのに、夏を通り越して秋の気配など、感じていていいはずがない。心と体がアンバランスになっているのは、いうまでもないことだ。世界的に異常気象だというが、こんな状態だと、世界はどこへ向かおうとしているのか、行く末が非常に心配だ。

二泊三日で実家に帰ってきた。甥に会うために帰ったのだったが、甥はプールに励んでいて忙しいとやらで、悲しいかな、会わずじまいで戻ってきた。その代わりというのもなんだが、犬のムクとアニーとご対面してきた。先月は、猫のクロが天国へ旅立ったばかりだったので、残された小さき者への私の愛情はひとしおだった。クロと

は、弟が大学時代に、ボストンから遥々連れてきた猫で、黒いから「クロ」。何とも、弟らしい。私が倒れて以来、そのクロは後ろ向きで何やら悩んでいた姿が、私の心には大きく残っている。

今回、家に帰ってしみじみ感じたことは、あの元気だった父の、メガネの奥に光っている涙を見たとき、今まで当たり前に過ごしてきたが、少しずつ何かが崩れ去ろうとしている気がして、止めどなく怖いものを感じた。ちなみに、なぜ父が泣いていたかは、持病の痛風が悪化して目にきたらしく、慢性的に涙が出るそうなんです、と後から母に聞いたことだが。

こうしている間に、せみが騒がしく鳴き始めたが、どうなってしまう、今年の凍える夏よ。

（二〇〇三年八月）

ストレス解消法

目下、唯一のストレス解消法は、パソコンに熱中してその時々の達成感に満足することぐらいかな。本当に、今の私にとって、ストレスのもって行き場がないので、困っているところだ。

約一ヵ月に一度のお散歩も、いい気分転換にはなるが、ストレス解消とはおおよそほど遠い。何かに熱中して、体に溜まったものを発散しなければ意味がない。昔は、常に自分の過ごした時代の背景には、体力の限界までいく何かしらがあった。それが、私の場合、ほとんど全部がスポーツだったりするが。だから今でも、体力の最も消耗する、好きなパソコンに打ち込むしかないのだ。

今日も何人かの人達が、連れ立ってローリングバレーの試合に出掛けた。私は、心から羨ましいと感じた。私からスポーツを奪ったこの病気を、改めて疎ましいと思った。何か、私一人とり残されているような錯覚に陥ってしまうのを、肌身に感じていた。

私は、ストレス解消法の大切な方法に、職員さんに気付かされた。「大平さんのストレス解消法は、何ていったって、笑うことだよね」。

そんな身近なことに、今まで気付かなかったなんて・・・。私の特技は、思い出し笑いをすることで、まわりがシラーッとしてても、かまわず一人で、「ブハハハッ」と心の底から笑い出してしまうことだ。本人は、素晴らしく恥ずかしいのだが、自然現象なのだから仕方がない。だが、一通り笑い終えると、これが、ことの他スッキリするのだ。

以上が、私のストレス解消法。　歌を歌い、好きなスポーツを体の続く限りトライしてみたい、という願望からは、切ないくらいかけ離れている。

（二〇〇三年九月）

夏が来れば

私の場合、真っ先に思い浮かぶのは、真っ青な海、といいたいところだが、いつからか荒れ果て淀んでしまった湘南の海。それでもめげることなく、懸命に波を捕まえていた〈あの頃〉が、私の脳裏に焼き付いている。

十九歳、雄大な海への憧れから、波乗りを始めた私。何か自分らしく熱中できることはないかと模索の末、これぞピッタリと私の心を捉えて離さないものが波乗りだった。そうと決めたら、私は早速知り合いのお兄さんから、安い中古ボードを購入した。ウェットスーツは御茶ノ水でフルオーダーした。やる気は満々だったが、悲しいかな、漁師にしか見えない格好だった。

拠点としていた所は茅ヶ崎だったが、波がある場所を探しては車で移動した。男の子たちに混じってパドリングをするのは些かきつかった。それでも、いい波を捕まえるため、私は必死でついて行った。波待ちは得意だった。波待ちをしながら一人遠くを眺めていると、壮大な気分になった。自然の逞しさを感じずにはいられなかっ

た。爽快に波を滑るのはこの上ないほどの快感だが、人間が何も手を加えていない、その、ただ広い海とそれに溶け込むような空は、私を魅了し続けた。

自分の目指す波が3、4m近づくと、足で急いで水を掻き分けながら岸に向かって方向転換し、怒涛のごとくパドリングを開始する。ボードのお尻が波で持ちあがった時がチャンスだ。それからは腕の力で一気に立ち上がる。もしバランスを崩すと、渦巻く洗濯機のような海の中へ、ボードに抱きついたまま放り込まれる。その悲惨さは言うまでもない。

海に出た瞬間から、大自然とちっぽけな自分がゆっくりと調和し始めて行くのを感じ、やがて一体化する。それがたまらない魅力だった。しかしながら、私たちの愛してやまぬ波乗りは、常に危険を凄く伴っていた。例えば、自分と自分のボードをつなぎ止めている、足首に括り付けたパワーコードがゴム製でできているため、海にドボンと落ちて水面に顔を出す瞬間、ボードが勢いよく水面を滑って、顔面めがけて吹っ飛んでくることがある。悪いことに、戻ってくる場所が、顔を出したちょうどその位置なのである。それで友人の眉

間にボードが突き刺さったこともある。今想うと、身震いするような出来事だが、当時は呆れるほど怯むことがなかった。

まだ星が降る夜半、車の屋根に犇めき合うようにボードを乗せた車三台を連ねて、友人の伊豆の別荘に行ったこともある。楽しさに羽目をはずし、爆竹の嵐だったっけ。瞳を閉じればすぐに戻れる十代の〈あの頃〉を、今しっかりと見つめ直している。

若さゆえ怖いもの知らずだった〈あの頃〉、二度と戻ることのできない〈あの頃〉、夏が来るたび思い出しては、病に倒れた今、老女のように一人パソコンと向き合っている自分が悲しい。

（二〇〇三年九月　文芸ふじさわ三八集掲載）

お祭りのメロディ

八月三一日、夏も過ぎゆく土壇場に、希望の郷の大イベントであるお祭りが厳かに始まった。我が家は、ハリキッて両親がきており、私などは、半ば強引に母に浴衣を着せられた。何だか照れくさいのである。

出店で私が目指すは、チョコバナナクレープ。両親は私の甘いもの好きに驚きつつも、たこ焼きなどを買って建物の中に入ったが、父が生バンドを聞きにいくというので、食べるのもそこそこに切り上げて、外に出た。私はすぐに、懐かしさに包まれた。傍にいた母に、「この曲が私の好きなサザンオールスターズだよ」と、いいたくて、喉まで出かかったが、淋しいけど、ひとり心の中で呟くしかなかった。私がパソコンから離れて喋るときは、相手に負担をかけてしまうので、ついつい言葉を飲み込んでしまう。

自分の好きなメロディは、懐かしい記憶を呼び覚ます、一番身近な手段だと思うのである。私は、単純に、耳が聞こえない人は可哀想だと思う。この寂寥感を味わうことができないのである。もちろん、障害を抱えている人はみんな辛いが、音楽を聞けないことは、致命傷であるとさえ感じる。私たち親子は、一番聞こえそうな場所を陣取った。「真夏の果実」が流れてきたときには、思わず感動して、涙が溢れそうになった。音はちょっとはずれていたが。

私も高校時代、文化祭の催しで有志が集まり、そこでキーボードを勤めたことがあるが、当時のことがやけに鮮明に幻となって、私の心の目に映し出された。自宅にこもって、テープを耳に当て、一音一音聞き逃さずに、正確にコピーをしていく。そんなころもあったなんて、改めて、自分の幻を眩しく思ったりした。私は、キーボードがメインの、生ピアノで弾く「私は風」の、あの懐かしい感触を思い出しながら、キラキラと光を放つ一人々々に、熱い視線を送っていた。

両親は、用事があるというので、六時前に帰り、私も疲れて部屋に引っ込んでしまったので、恒例の花火大会と盆踊りは、残念ながら見過ごしてしまった。

まだ幼かった頃、父に手を引かれ、田舎の盆踊りに連れていかれたことを思いだす。そこには、リズム感に溢れ、実に個性的な踊

りをする二〇歳前後の若いお兄さんが、飛び跳ねるようにしながら踊っている姿が、私の目に飛び込んできた。盆踊りの輪が一周して、お兄さんたちが私の目の前に来ると、幼いながらも妙に胸が高鳴ったのを覚えている。おそらく、傍観者でなかったら、先頭きって踊っていたはずだ。あのときの、お兄さんたちのように。

こうして、今年も滞りなく、大イベントが終わった。ドッと物悲しい気持ちになったのは、私だけだろうか。

（二〇〇三年九月三〇日　かわうそ文芸掲載）

安楽死を見つめながら

澄み渡った秋の遠い空を眺めながら、一人物思いにふける私だった。

クロが死んで逝くとき、獣医さんに安楽死を勧められた。家族はこぞって、それだけはやめてほしいと、獣医さんに懇願した。クロは、内臓の大部分を損傷しており、獣医さんが安楽死を提案したのも、非常に頷けた。

私は以前、自らの安楽死を切に希望しており、いざ、動物の安楽死に立ち会うと、生きていることを賞賛する。おそらく、人間でも同じことをしただろう。命をつないでいることってそんなに素晴らしいことなのか。本人は周りにわからない苦しさと戦っていて、さっさと安楽死を選んだかもしれない。そう思うと心が痛む。死んだら可哀想とか、死ぬと悲しいとかいうことは、私たちのエゴだ。そのとき出来る精一杯の方法は、苦しみのない世界へ連れ出してあげる以外に、私たちの取るべき方法はないような気がする。即ち安楽死だ。クロの命のともし火がことときれるまで見守るなんて、クロにし

てみれば、大変な有難迷惑だったかもしれない。家族側になった見解と、本人の立場になった見解とが、あまりに違うことはわかっていたはずだったが、改めてその難しさに問いかける私であった。

動物の死のあり方でさえ、困難を極めるのに、それが人間の場合だったらどうなることになるだろう。安楽死が、ある一定の基準をクリアすることが条件になってくるのも、仕方のないことだ。今まで、安易に安楽死を口にしていた自分が、何だか小さい存在に見える。クロの安楽死を巡って気づかされたことが、私には大き過ぎた。

今頃クロは、どんな思いで遠い秋の空から、私たち家族を見つめていることだろう。あのとき、こうした方がもっとクロにとってはベストだったかもしれない、といった気持ちが枯れ葉が舞い落ちる度に湧き起こる、そんな季節である。

（二〇〇三年一〇月）

家族

私にとって家族とは、自分がこの世で存在する上での一番大切な人たちであり、同時に、やるせないほど儚い集団であると感じる。私の両親は、月に二度この部屋を訪れるが、その度に目に見えて老いていくのが、手にとるようにわかるのがつらいが、どうすることもできない。自分の無力さと、自然の摂理というものに、改めて虚しさを覚えずにはいられないのだ。

私は、弟が結婚したとき、お嫁に行くのでもないのに、これぞ小姑の気持ちとやらを味わった。まだ、一日とたっていないのに、なんだか心に穴があいて、風がヒューヒュー入り込んでくるような、家族を一人取られたような錯覚にとらわれ、ずいぶん落ち込んだのを覚えている。

私は、倒れて以来、弟に両親を頼むと言い続けてきたが、弟は私にはできないことを着々と果たしてくれていて、私は内心、ホッと胸を撫で下ろしている。我が弟は、昔から家族のみんなにモグラと呼ばれ、（なぜかと言うと、曲作りの仕事上、昼と夜が逆転した生

活をしていたため）人並みの結婚生活がかなり危ういと、私はひそかに思っていたのだ。

遅まきながら、我が家は、四人と犬二匹で生活している。全員友達感覚なのが珍しい。父に威厳がないというか、それなりの風格を兼ね備えてないというか、ここまでいうとあんまりにも父が気の毒なので、こうつけ加えておきたい。父は器が大きいのだ。母は母で、まさしく悪友のような感じ。父を話の種に、ブラックユーモア全開バリバリ。この父と母に私は昔から自由奔放に育てられた。変な人、と思われているだろう、この突如によく笑う性格は、この家庭だからこそ培われたものだ。

私は、幸運にも家族がよくしてくれることに感謝するが、何時までこのまま衰退せずに続くんだろうかと、いつも先々を考えている。今が幸せであるからこそ、遠くを見つめてしまう。私が今一番求めているのは、永遠なる普遍的な家族なのである。

（二〇〇三年一〇月）

誕生日の花

病気で倒れてからしか、誕生日の花には、とんと縁のない私に、以前家にいた頃、毎年私の誕生日になると、バラの花束を贈ってくれるステキな叔父がいた。毎年届くバラを見るたび心は癒されたが、倒れてからの年月が容赦なく過ぎていくことを実感していた。その頃の私は、焦りにも似た追いつめられた感情で支配されていた。

まだショートステイを利用しているときだった。私の部屋に、バラの花束を抱えて見知らぬ女性が入ってきた。聞けば、その人はお花屋さんで、ある私の知人からの依頼で、バラの花を誕生日プレゼントに、ということだった。天にも昇るようなような気持ちというのは、まさしくこのことだと思った。よくぞこんな私に、奇特な人もいるもんだ、と感心した。今の私にできることと言ったら、パソコンと、物を食べさせてもらうこと、人の話を聞くこと、テレビを見ること、音楽を聴くこと、寝ること、起きること。こんな私に、バラなどもったいないったらありゃしない。これぞ無償の心の極致ではないだろうか。私は、贈り主に感動すら覚えていた。

私は自分の誕生日の花を知らない。そういったことには、てんで無知なのだ。コスモスが好きだから、ああいう花であればいいと思うが。なぜコスモスかといえば、まず花の漢字名がいい。知っての通り、「秋桜」なんて、なんてロマンチックなんでしょう、とガラにもなく思うのである。秋風に揺れる可憐なイメージも気にいっているのだ。私は昔から、何につけても、華やかさより可憐さを求めてきた。華やかすぎず、さりとてこじんまりとまとまりすぎず、微妙な兼ね合いが備わった花がコスモスだと思っている。しかし、だからといって、華やかな花を否定しているわけではない。そのときの心理状態によって、要求する花も違ってくると思うからである。パァーッとしたい気分のときは、それなりに華やかな花を見ていたいし、辛いときは、小さくて弱々しい花を見つめたい。こうして考えると、何気なく咲いている花たちも、人間の喜怒哀楽を背負って短い一生を終えるんだなぁ、と思ったら感慨無量になった。

頭の中で、山口百恵の「秋桜」の曲が流れている。

（二〇〇三年一一月）

化粧

まったく化粧をしなくなって、一〇年以上が過ぎた。昔は、アイラインを引き、それなりの化粧を施して、やっと背筋が伸びた気がした。それだけ化粧なれをしていたのは、以前の二二歳から二年間ほど、横浜ビブレでインフォメーションの仕事に携わっていたせいだろう。それから後、上階でオペレーター兼アナウンスの仕事に就いたのだ。

そのころは、若さゆえ化粧に対して何の疑いも抱いていなかったが、二五・六歳ごろからだったろうか、化粧をして変わってゆく自分自身に、あるときから不信感が芽生え始めた。これは本当の私じゃない、化粧の下に隠れている私の素顔をもっと認めてほしい、と。それで、私としてはありのままの私でいたいと、何度か化粧方法を変えたこともあった。仕事場では、スッピンはいなかったのだ。

そんな私が、病気で倒れたショックで、昔の顔の名残りが少しだけ辛うじて残った。今や、ありのままの素顔だが、素顔になったことには、これっぽっちも抵抗を感じてはいないが、あまりにも昔と

違うこのギャップに、戸惑いを覚えずにはいられないのである。今の私は、写真を撮ることも鏡を見ることも嫌いなのである。これは、一女性として嘆かわしいこととは、重々承知であるが、非常に辛いことだ。未だに私は、ガラスに映った全身を見るたび「あーぁこんなになっちゃって」と、呟き、悲しむのだ。そりゃぁ悲しいですよ、こんなに変わるんだから。化粧をするどころではない、と思っていたら、今年の夏のお祭りの日に、ほぼ強制的にわが母にうっすらと化粧をされた。私は、今の顔には化粧は似合わない、と思い込んでいたので、今まで頑なに拒否してきたのだ。でも、お祭りの日、浴衣を着て化粧をしたら、今までの気分が一新されてまた明日からの励みになったのだ。何であんなに、化粧を嫌がっていたのだろう、と少し恥ずかしい気持ちになった。ありのままの素顔が基本だが、たまには気分をかえて、いくらこうなってしまったとしても、そのときの時と場合によっては、化粧も気分転換のいい方法だと思うのであった。

（二〇〇三年一二月）

アニーの消えた空

私がまだ元気だった頃、子犬で買われてきた、シェットランドシープドックの小型犬のメス、「アニー」。命名者は私であった。この頃初めて、可愛らしいモアモアの犬が登場するミュージカル「アニー」を見て感動し、うちに帰り、特攻隊のように部屋中を駆けずり回っている子犬を見た途端、迷わず名前を「アニー」に決めたのだった。遠い昔のことである。

「アニー」は知っている。我が家の風景のなにもかもを。私が倒れたとき、ベッドに横たわる私をジッと窓ガラスを隔てながら、不思議そうに且つ優しく見つめるあの「アニー」の眼差しは、一生忘れない。その「アニー」が、二〇〇三年十二月二七日、肺がんと老衰のためこの世を去った。医者は入院を勧めたが、母が最期までうちで見取ってあげたいからと、強く拒み、家で看病していた。私は遠くで心配するだけだったが、さぞ母などは大変だったに違いない。

三一日の大晦日に実家に帰ったのだが、私は「アニー」と面会できるものとばかり思っていたので、お線香の匂いがたまらなく涙を

誘った。母が私の傍にきて、死ぬ間際の「アニー」の様子を、セツセツと語って聞かせてくれるのだが、「アニー」の心境がもし私だったらと思うと、口の使えない苦しみを少しだけ分かち合った気がする。どんなにか苦しくて心細かったろう。犬に生まれた切なさを心の底から感じた。そうしたら同じに私も切なくなって、止めどなく涙が頬を伝わり流れた。

昨年は、猫の「クロ」も亡くし、時の流れを強く感じずにはいられなかった。私がどうあがいてみても逆らえない流れに翻弄されて、プカプカ喘いでいる自分がいた。時代の移り変わりというのは、残酷なものだ。老いていくということは、生きているものにおいて、全てに訪れることはいうまでもなく解っているくせに、自分だけは、と否定してしまう。悲しい現実を突きつけられた空を見たのであった。

（二〇〇四年一月）

「雨にも負けず」について

私は、一冊目の自叙伝の中で、宮沢賢治の詩の「雨にも負けず」から、最初の二行を引用させてもらったことがあった。それは、この詩の結末が解っていなかった為、ただ乱暴に話の中に組み込ませたものである。

私は現代社会を生き抜いているから、正直言って宮沢賢治のあまりの謙虚さに驚きを隠せなかった。謙虚であることは日本では美徳とされているし、私自身も謙虚さを常に心がけてはいるが、宮沢賢治が熱望する人間には成り得ないし、また成りたいとも思わない。

人は自分の感情に素直でなければならない、と思うのである。欲もあれば、怒る時もある。それらをなくしたら人は人と呼べるだろうか。まさしく悟りの境地である。

人が、悟りを開くということは、心を無の状態にすることと等しい。そのようになることは、た易くはない。この詩を読んでいたら、そのた易く儚い無の境地に踏み込みたい、と願っているように私には思えた。

誰でも独自の理想論はある。何も、宮沢賢治だけが崇高な理想論者などといっているわけではない。

この詩を通じて見えてきたことは、彼の幼い頃からの苦労を強く感じ、それによって芽生えたボランティア精神というものを感じ取れたのである。

（二〇〇四年一月）

「誕生日の花」NO.2

この間、私の優しき主将である、山崎先生という物書きの御方に、パッと見て、風貌は、どこかの山奥で、ろくろか何か頑固一筋に焼き上げてるって感じ。そんな先生に、私の誕生日の花を調べてもらった。

野バラだそうである。性格は、どこかとぼけていて、ユニークで、ファッションセンス抜群、とのこと。私としては、バンバンザイである。これで、どうしようもないのに当たったら、目も当てられない。願ったり叶ったりである。

野バラは、普通、庭先で咲く品行方正なバラとは違って、野原に、自由奔放に咲いているイメージが、何とも私ピッタリであると感じた。

毎日がニュートラルな感じがいい。私は、束縛が大の苦手である。でも、悲しいかな、今の私の場合、ある程度の監視下になければ生活が出来ないのが、自分で自分が悔しい。パソコンをやり始めたのはいいが、一文字も書かないうちに咳をして、ナースコールも手か

らとどかず、横になったまま一時間も二時間も、ひたすら助けを待っている、ということが多々あるので、思わず笑ってしまうが、本人は、どうにも怒りを押さえられず、怒る相手がいないもんだから、思い切り職員さんにブーたれてしまうのである。困ったものである。

山崎先生は、私のことを男性的であると表現したが、それには、ちと不満である。苦心してパソコンで打ったエッセイを見せても、そういった言葉が並んでいる。見透かされたようでドキッとしたのは事実だが、なんせ、することがオートバイにサーフィンじゃ、仕方ないけど、私の隠れた女らしさも見つけて欲しかったのだ。それにはほとんど困難を極めるが、少しは分かってくれないかなぁと思うのである。

誕生日の花を調べてもらって、再確認したことが多かったのは何故だろう。

（二〇〇四年二月）

今を生きる

つい先日のことである。何やら男性の職員さんが、ビデオを動かしているなあと思ったら、オートバイのビデオで、何と、それも私が昔乗り捲くっていた車種と同じだったのだ。わざわざテープを持ってきてくれたそうである。聞けば、その職員さんも、以前私と同じタイプのオートバイに乗っていたそうで、奇遇にもビデオを見つけたという具合だ。

私は、懐かしさに胸が高鳴った。私がどれだけドキドキしているか、回りに伝えたいほどだったのである。

まるで自分が、アクセルを入れて走っているかの如く、コーナリングなどは一人胸弾ませていた。私は、実際あんな風に上手に走れなかったけど、画面の躍動感が伝わってきて、いつの間にかビデオと一体化されている自分に気づいた。

熱く燃え尽きた記憶が多いほど、今の自分が大きく輝くと信じている。何も物欲がない浮浪者でも、何でもいいから本人が暖かくなるような思い出があれば、健やかな毎日を送れそうな気がするので

ある。

とは、いったものの、現実との激しいギャップ。ここは何処、私は誰？といった現実が、私を苛む。

今の私にとって、「今を生きる」ということは、大変つらいことである。私に与えられた大きな現実を、泣いても叫んでも、受け止めざるを得ないからだ。私には、その受け止めなければならない悲しくて残酷な現実が、迫りくる巨大なモンスターのように感じてならないのだ。

私はこんなにも家族の愛に包まれながらも、一人ぽつんと、孤独と見詰め合うようになった。どんなに優しい日々が流れようとも、一人になってから味わう苦しさが待っているから、その目は凍りつく。

私は、せっかちな癖がある。自分の中で、その話題が終わってしまうと、さっさと次の話題に移ってしまって、相手を困惑させてしまう悪い癖があった。

「生きる」とは関係があるかどうか分からないことだが、何だかヒョッと思い出したのだ。

（二〇〇四年二月）

パンプス

女の子なら誰でも、少女時代から憧れを抱いているパンプスなる靴を、私が初めて履いたのは、一八歳の時だった。

私は一万円札を握り締め、横浜のダイヤモンド地下街の靴屋さんに行ったのだった。すると私の目の前に飛び込んできたのは、赤札商品でベージュの、私が捜し求めていた物だった。だが、その後このパンプスを買ったことが、大きな間違いだったと気付くのである。

私は日本武道館で行われる専門学校の入学式のおしゃれを、入念にしていた。このとき初めて履くパンプスには、内心やっと大人の感触を味わえるようなドキドキしたものがあった。

行きは、心もウキウキして、足まで神経が行き渡ってなくさほど痛みは感じなかった。しかし、帰り道になると、私のだんびろの足はますますむくみが激しくなって、立っていることも困難になってしまった。私は必死の形相で帰り道を歩いた。顔は鬼のようになっていたから、表通りを歩けず、裏通りから帰った。そのときほど、赤札商品に飛びついてしまった自分に嘆き悲しんだことは無い。

想像してみて下さい。悲しいですよー、上から下までバッチリおしゃれした女が、鬼のような形相で足を引きずりながら歩いている様子。怖いでしょうねえ。

そんな私は良く、天然ボケと人にいわれた。

（二〇〇四年三月）

約束

私が倒れる前のことだった。福島県にある関の里という別荘地に、僭越ながら建てられた我が別荘に家族で遊びに行ったときのことである。

母と二人でお風呂に入り、私は一人のんびりとしていた。日は、まだ夕暮れどきだった。

私は母がいないことに気付き、二階のベランダから、ふっと下を眺めてみた。すると母は、もうすでに、とんぼと戯れていた。指をぐるぐると回して、枝先に止まった一匹のとんぼの目を回しているしぐさが、私の目には我が母でも、とっても無邪気で可愛らしく映って、今でもその光景が忘れられない。

母は、とんぼと約束をしていたようだ。これは私の推測だが、母は出身が福島なので、必ずまたこの地へ戻ってくると決めていたらしい。

それは、山で産まれて山へ帰るということである。

建物の真ん前には、広い舗装された散歩道があり、周りは深い林

で覆われていた。夏などは、うっそうと繁る木々のハーモニーを聞くと、淀んだ私の心も自然と溶け合った。

そんな、心和ませてくれた憩いの場所へは、もう行けない。建物は、急な階段を登った所へ建っているのだ。車椅子では、到底無理な場所だった。

母が、とんぼと約束する面影が、胸に焼きついている。もう、あんな生き生きとした母に会えないのかと思うと、改めて自分の病気を呪ったのであった。

（二〇〇四年三月）

美食の一品

それは、今から思えば、最初で最後で食べた弟との一杯のラーメンだった。

父と母は、福島の我が別荘に先に行き、弟と私は、その車を後から追いかけた。弟が運転し、私は助手席に乗り込み、そのころはまだ元気だったクロを後部に押し込んだ。ちょっとしたドライブだった。

私の心が落ち込んでいるとき、真夏のロックコンサート（ヒューイ、ルイス&ザ、ニュース）に、弟とふたりで出掛けたことや、真冬だったか人工雪だったか忘れたが、日帰りスキーに連れ立って行ったことなどを思い出す。ひとり打ちひしがれていたときだったので、弟の知ってか知らずかの優しさをこのときほど身にしみて感じたことはない。

弟の隣りに乗ると、あのときの何ともいえない、しみじみとした情感がひしひしと伝わってきた。

私達は、休憩も兼ねて一軒のラーメン屋に入った。そこは細々と

夫婦らしきふたりで営んでおり、お客は私達以外、ひとりもいなかったが、味は素晴らしく、私達を満足させるものだった。私は思った。お店の人には、私達ふたりが、どのような間柄に映って見えるのだろう、いろんなことを、あれやこれやと考えていたら、ひとりで気恥ずかしくなった。弟は、そんな姉を知るよしもなく、スープも残さずたいらげるとサッサと立ち上がり、店を後にした。私は、お金を払い、小さな声で「ごちそうさま」といい店を出た。

家で、弟とラーメンを食べることはあっても、外でしかも向き合い食べたの初めてだったから、姉としては、妙に照れくさかった。あのひとときが私の元気なときにふたりで食べた最後のラーメンになるんだったら、もう少し、あのいつも憮然とした弟に感想を聞いておけば良かったと思ったのである。

ああいう場合、弟という動物は一体何を考えるものなのか、ひたすらラーメンのことばかりしか頭にないのだろうか。目の前に姉がいるという存在価値はないのだろうか。私から見ると、弟の行動は実におもしろい。それもこれも、男脳と女脳の構造が、根本から違うわけで、身近にいる弟が、標的にされるのである。

いずれにせよ、福島で弟とふたりで食べたラーメンは、忘れない思い出深い一品である。

（二〇〇四年三月）

雛祭り

坦々と、毎日が過ぎ行く中で、雛祭りが開催された。いつもは、トレーナーにジャージのズボン姿の女性も、この日ばかりは、艶やかな着物に身を纏い頬を染めていた。

私の着物は、母の物だった。母が若いころ作って、一度も手を通さずにタンスに眠っていた着物を、母は、ハリキッて私に着せようと引っ張り出したのだ。私はその着物を、一目見て感動した。色は、薄黄色で、全体に赤紫の

薄い梅の花が散りばめられていた。何て優しい色合いをした着物なのだろうと思った。当時の母の思いが垣間見えるようだ。

本当は、母は、私が元気なころ、この着物を着せたかったのじゃないか、という思いが、私の胸を締め付けたが、今こうして、私が母の着物を着れることがとても嬉しかった。

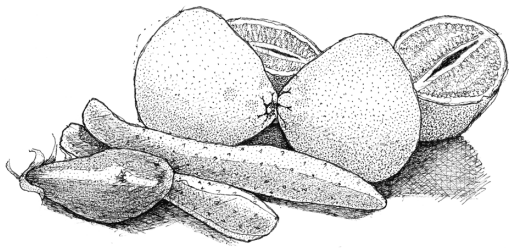
倒れてから今までの道のりが、やけに鮮明に、私の心に浮かんでは消えた。

今迄家族と、いや母と病気と戦ってきた日々が少しだけ報われた

ような気がした。こんな日がくるなどとは思ってもみなかったのである。

人間生きていれば、山あり谷あり。その中で、一瞬でもキラメイている瞬間があればこそ、人は生き甲斐を感じるものだと思うのである。だからこそ、私はこの一瞬を大切にしたい。

（二〇〇四年三月）



桜　NO.2

また、桜の花びら舞う季節がやってきたのかと、あまりに早い四季の移り変わりに、内心妙に焦る気持ちを押さえ切れないでいる。何年過ぎても春になると、私達にやすらぎと優しさを与えてくれている「桜」には脱帽するのである。冬の間閉ざしていた心も春になり、ようやく桜の光を浴びるとたちまち癒しの空間となって、人々を魅了し始める。

私も、お弁当やお酒を携えて満開に咲き乱れる桜の木の下で宴会をするのは大好きだが、客観的に見ると、あの青いシートが美観を損ねているようでいけない。お花見を桜の木の下で楽しんでいる私達も、せっかく咲いた見事ではかない桜の一生を、終始脇役の目に徹しながらその姿を見届ける必要があるのではないだろうか。あまりに人間中心の世の中に慣れてしまって、私達は自然と共存しているんだってことを見失っているのではないのだろうか、と思うのである。何でもかんでも、人間が当たり前のように、しゃしゃりでては自然と打ち溶けているようで、本当は全くといっていいほど溶け

合っていないのが悲しい。
この間もニュースで、切ないほど見事な桜の木の下で、花見見物で訪れた酔っ払った人間同士のけんかのシーンが放映されたが、完璧に満開の桜と不釣合いで調和の取れていない、というか私達人間につかの間の最高の癒しを与えてくれる桜に失礼極まりない、と心から感じたのである。
人間ひとりひとり、桜に対していや自然に対して、もっともっと自覚を持った接し方が必要であると強烈に痛感したのである。

（二〇〇四年四月）

顔

私は、自分のアパートの、目と鼻の先にある茅ヶ崎市立病院へと真っ先に運ばれ、それから五ヶ月間、聖マリアンナ病院で細かい検査を受け、七沢リハビリセンターで七ヶ月もの間猛特訓を受けたが、何の回復の兆しも見せなかった。
その後に自宅に戻ることになるが、テレビの画面を消した暗いブラウン管に映る、自分自身の顔が妙に恐ろしくて、ひどく悲しかったのを決して忘れない。現実を受け止められず、毎日魘され、もがいていた日々。
私は、今でも夢で魘される。眠りが浅いのか、ほとんど毎晩夢を見る。もう倒れて一〇年以上にもなるというのに、往生際が悪いのか、夢に出てくるのは決まって昔の私。
外見上の私の顔は、いいつくせないものがあるが、内面的には、充実しているときもある。ときもあるのだ。半分以上は、脳幹部梗塞との苦しさと戦っているから、無理もない。
若いときは、元気ハツラツだった横顔も、今から思えば未熟その

ものだったが、多少は成長したのかも知れない。最近の私の横顔は、自分自身パソコンを打ちながら微妙に何か違うものを感じる。近頃は、自分で見つめ直す時間が増えたからに違いない。

これからの私の顔の変貌に、いささかの恐怖は感じるが、今迄以上に、自分自身を見つめることを大切に生きようと思う。

私は、知らず知らず気が付くと、眉間に皺が寄っていることがある。妙なとこに神経質な所があるのだ。たまに、そのままになったらどうしようなどと考える。心の乱れは、顔の表情に表れがちだというから、なるべく皺が寄らないよう、これからもっと先まで心掛けなくては、と思っている。

（二〇〇四年五月）

無題

あの時のことは、しっかりと私の脳裏に焼き付いて忘れられない、一生を左右した、私にとってこの世に生きてきた最大の、忌まわしい過去なのである。

当時私は、結婚問題に揺れていて、その憂さ晴らしに後輩とふたりで、山下町にあったラ・ムーンというディスコにいった。（今ではクラブというらしいけど、あんな不健全な場所とは違い、私達の頃は、もっと健康的だったと思っているが）

その日は、朝から降っていた雨も夕方には上がり、必要なくなった長い傘を、フロントに預けて、慣れた調子でロッカーの鍵を明け、貴重品を収めて店内に繰り出した。まだ七時過ぎと、時間が早かったので、店内はガランとしていた。私は一口運ばれてきた水割りに口をつけ、中央で踊っている二十代前後のバク転さながらの踊りを見ながら、ハアーと一息「私の時代も、もう終わったなあ」と呟いて、フッと立ち上がった。その時だった。目の前が真っ暗になり頭がぐるんぐるんと回り始めて、急な吐き気が私を襲った。立っても

いられず、かがみ込むような姿勢でトイレに駆け込んだ。
お酒も一口しか口にしていないし、もっと怪しんで、その足で病院に駆け込めばよかったと今更ながら後悔している。私は、吐き気と頭のどうにもならない苦しさに襲われながら、後輩にタクシーを呼んでもらい、ふたりでタクシーに乗り込んだ。その時は、無我夢中で、何故靴が履けないかなどと考える余裕がなかった。私は一人暮らしの茅ヶ崎のアパートに行き着くまでに、二回ほどタクシーを止めた。真っ暗な学校の校門と、明るい灯りがともる家が、対照的に私の目には映った。すべてをハッキリ憶えている。
タクシーを降りて、おぼつかない足でやっとのことでアパートに着いた私は、何かわけの解らないことを叫びながら、薄れていく意識の中で、「これはただごとじゃない」と直感したが、そこで意識はプツンとなくなっている。
無断欠勤をして二日後に私はようやく仕事の上司に発見された。最初は、事件と思われたらしく、警察の方とすったもんだし、大変だったらしい。
病院では、始めのうち原因がわからず、脳腫瘍と診断されたそう

だ。意識がないにもかかわらず、何故か母があたふたしているのを憶えている。わずかにでも意識があったのだろうか、謎である。
後に、脳梗塞の中でも手におえない脳幹部梗塞だということが解った。脳幹部梗塞とは、脳の中でも一番重要な、生命を維持していく上での幹となる所だそうだ。そんな場所の脳管を詰まらせてしまった私に残されていた機能は、考えることと、怒ったり泣いたり笑ったりする感情と、少しだけ動く右手と、右足で蹴る力だけ。顔なんか蚊に刺されたら大変なのである。食事は職員さんに食べさせてもらっている。喋れないからコミュニケーションが上手にとれないのが悩みの種。梗塞を起こした所に沢山の神経が集中している為、いろんな神経に支障をきたすのだ。だから症状を訴えてもほとんど解ってもらえないのが悲しい。
でも、考える力と少しでも動く右手で、パソコンを操作して自分の気持ちを、こうして表現出来る私は幸せだと思う。
自分は、不幸だ不幸だと嘆くより、出来る範囲内で、小さくてもいいから、自分の生き甲斐になることを見つけ出すことが、私達障害者にとって、大切なことである、ということを身をもって知った

のである。

（二〇〇四年五月）

優しさ

ささやかな優しさに触れることはよくあるが、人間の究極の優しさって、一体どんな風にどんなときに、表れるんだろうと考えてみる。

この前ＴＶで、盲導犬の役目を果たした老犬のゴールデンレトリバーを、自分の家に引き取って看取りきるシステムが、日本にあることを知った。普通ならペットとして、可愛い可愛いと子犬から育てるところを、あえて役目を全うした老犬のみを死ぬまで面倒をみる。私が、そこに人間の究極の優しさを感じたのはいうまでもなかった。

母性の優しさにも、究極の愛を感じる。人間界以外でも、母性本能というのは逞しく、これこそ無償の愛というべきものである。見返りが欲しくて、優しくしているわけではないが、どうしても優しさの代償として見返りがつきものである。だからこそ母が子に対する優しさは、無条件な優しさなのだ。

可愛らしい花を見て、素直に心から可愛いと思える気持ちがあることこそ、優しさの基本だと思う。花を見る人の心が荒んでいれば、

その花は、曇って見えないだろうし、恋でもして花を見れば、輝くダイヤモンドに見える人だっているだろうし、その時々によって変化するのが優しさであると思う。
また、育った環境に大きく左右されるのも人間の優しさに顕著に表れる。
人間には、誰しも優しさの核のようなものを持っていて、それが環境により支配されたり、生きて行く上で心が微妙な形に変貌を遂げるものと思うのである。

（二〇〇四年六月）

一期一会

時折ここ希望の郷にも、福祉の勉強として、若い実習生が毎日決められた期間だけ、入れ替わり立ち代わり一人ずつ私達の介護にやってくる。その度に私は、何もかも初めての経験なのだから、もう少し優しく接してあげなくちゃと思いつつ、そこがおばさん根性というべきものなのか、コーヒーの飲ませ方一つにしても、あれこれ難癖をつけてしまう自分が悲しい。
そんなある日、一人の実習生が、壁に貼ってある私の文章を見て、「パソコンで打った字は固いイメージですよ、何か自筆で絵などを描いてみたらどうですか？」と、初めていわれトンカチで頭を殴られたような気がした。
私の右手は、パソコンしか打てないと思い込み、絵を描く挑戦など今迄考えたことが、なかったのである。その実習生と、絵を描く練習をしたが、案の定、線もまともに引けなかった。
その実習生はいった。「誰だって最初はこうだよ、努力して上手になるんだよ。」私だって今迄努力してきたつもりだった。でも、

それは出来る範囲内のパソコンのみだった。何かに挑戦することはなく、あきらめていた。
ほとんど絶望視していたのだ。だけど、自分の中では充実感はあった。
何にでもあきらめることなく、一つ達成したら、それに甘んじることなく、努力は惜しまないことを肝に銘じたのである。
とは、いっても努力など大の苦手な私である。どこまで、その気持ちを持続させられるかが問題なのである。
大勢ここで出会う実習生の中で、深い感銘を覚えた一人の実習生が、何気ないようで重い言葉を残し、去っていった。

（二〇〇四年六月）

宿命

六月の夕日を、窓ガラス越しに真正面に浴びながら、私は、車椅子に身を委ねる。夕暮れだというのに、陽射しがあまりに眩しくて、思わず目を閉じてしまうが、キラキラ輝きながら、木々から覗いている光が、瞼に焼き付いて離れない。
いつも眺めている景色が、六月は、より一層趣を増す。
私は、夕食後にこの定位置で、外を眺めたり、一人物思いにふけるのが好きだ。えてして変わりばえのしない、空と木を眺めていると、四季を通じて、私の目には大きな変化に映る。
春には、私達の心も踊る桜の花が咲き、夏には、緑繁き深い味わいの、何処か懐かしい葉をつけ、秋には、遠い昔の恋人に想いを馳せることの出来る枯れ葉が舞う。そして冬には、今年も四季折々に懸命に生きたぞ、という証が枯れ木を見て伝わってくるのだ。
何でも、精一杯生きようとすれば、そこには感動が生まれる。桜の木一本でさえにもドラマがあるのだ。
どんなに人知れず、佇んでいる物でも、はかない一生がある。そ

れらを見届けるのが私に課せられた宿命ではないかと、最近つくづく感じてしまう。

そもそも、ここにこうして居ること事態が、私の宿命だったのだろうか。だとしたら、これは必然的なことだから、私がどう足掻こうと、免れないことだったのである。

私が昔、波に揉まれていたなんて誰も知る由がない。これ程の人生が、私を待ち受けていたなんて。

どこか風情のある、6月の夕暮れが、ふっと私を優しく包みこんでくれる。

（二〇〇四年六月）

あとがき

一九九一年、三月二九日、著者二九歳のとき、突然脳幹部梗塞という、生命を維持する部位がつまり、組織が壊死し、全ての運動機能を消失してしまいました。

わずかに動く、右手指を生かし、寝たままの状態ではありますが、パソコンを使うようになり、思うことを文章に綴るようになりました。

大勢の皆様に、支えられながら、自分の障害を、受容する力につながったように思います。

今回、エッセイ集の発刊にあたり、御尽力頂いた関係者の方々、大変お世話になりました。そして、施設の皆様方、ボランティアの方々、多数皆様方の御力添えと、御協力を頂いた御陰だと、心より感謝申し上げる次第でございます。

母より